

じゃっど・スヂ・イツ-日程

小幡順子

平成 29 年 12/23-12/30 参加者 16 名

12 月 23 日 (土)

福岡空港集合。バンコク経由とハノイ経由に分かれてビエンチャンへ出発。

12 月 24 日 (日)

専用車にて、ビエンチャン～タケク移動。

12 月 25 日 (月)

8:00 ホテルを出発し、セバンファイ地区ツウン村小学校へ。皆さんから預かった文房具やスポーツ用品、タオルなどの贈呈式後、ホストファミリーの紹介。机椅子募金で作成した机椅子に記名作業を済ませた後、学生達はそれぞれの家に荷物を移動。

再度集合して、ホストファミリーのお父さんたちを招待しての教育局近くの食堂で昼食会。「カエルが美味しい店」との教育長が勧めるので注文する。はじめは驚いていた参加者たちだったが、お代わりの要望があるほどの美味しさでした。昼食後、村で行われていた結婚式へ飛び入り参加。

ラオ族の結婚は婿入り婚が基本。そのため、結婚式は花嫁の実家で行われることがほとんどです。村中の人々が招待されて盛大に行われていました。民泊のない大人組はこの後タケクへ移動。

12 月 26 日 (火)

ホテル宿泊者はタケクからツウン村へ移動。週 1 回火曜日の朝にだけ行われる小規模の市場を散策。食料品数店と、衣料品や生活用品、薬草などが 1 店舗ずつ並んでいました。民泊の学生たちと合流後、教育局近くにあるセバンファイン郡病院見学。女性一人当たりの出生率の高いラオスでは母子保健に力を入れている。母子保健を潤滑に進めるために日本の「母子手帳」を導入して成果を挙げているという病院の説明に、Dr コンサップが「母子手帳」の導入については Dr

ソムチットが中心となって行ったと追加説明した。ツウン村は竹細工が盛んな村で、特に笠の生産には村の 8 割の家庭が関わっているという。笠作りと機織を見学。村周辺には広い田んぼ広がっている。村では 2004 年に政府主導で灌漑整備が行われ、その後二期作が出来るようになり、生活がずいぶん豊かになったと誇らしげに村長が話していた。

12 月 27 日 (水)

村主催のバーシーで、旅の安全を祈願してもらいました。途中、モン族の市場など覗きながらビエンチャンへ移動。

12 月 28 日 (木)

国立リハビリテーションセンターの一角にある国際 NGO「COPE」施設を見学。

ビエンチャン市郊外にあるサムケ小学校訪問。2002 年から支援している学校です。これまで寄贈してきたトイレや図書室備品などの寄贈品の確認作業を行った。なじみの校長先生は Deng 熱にて入院中で不在だったが、いつものように掃除がいきとどいた綺麗な校内だった。

開発中の中国特区を見学後、Dr コンサップ家にて昼食。「ラープ」や「ラオ風サラダ」「カオブン」などラオスを代表する献立を楽しみ、その後、ワットタットルアン、パトゥーサイ、ワットプラケオ、タラサオ(朝市)を観光。パトゥーサイの上から見えたワットタットルアンが、開発により見えなくなって残念だった。

12 月 29 日 (金)

バンコク経由、ハノイ経由の二班に分かれて帰国。それぞれ半日観光を実施。

12 月 30 日 (土)

早朝、福岡空港着、解散。

ラオスに行って

れいめい高等学校 2年 高浜大翔

私は小学校の教員になるのが夢です。そして社会は今、グローバル化が進んでいます。私が教員になる頃には、日本人じゃない生徒もちらほら見られるかもしれません。しかし、私はまだ海外経験が一度もありません。そんな中じゃっどツアーの案内をいただき、その中には支援学校もあるということで、これしかないと思い参加させていただきました。

初の海外ということもあり、楽しみの中に少し不安がある、そんな状態で日本を立ち出しました。最初ラオスに着いた時は驚きました。道路もしっかり整備されていて、本当に発展途上国？と疑問になるくらいでした。過ごしているうちに、飛行機の中での不安など自然と消えていきました。そして、3日目の支援校訪問で、自分の一番の目的である子どもたちと触れ合う時間が来ました、着いてすぐ、花束と首飾りをもらい、そこからは子どもたちの名前を聞いたり、シャボン玉で遊んだり、指人形で遊んだり、追いかけてっこしたりなど、気づいたら私が一番楽しんでいました。またその日からホームステイをさせていただきました。私はタケク村の村長さんのお宅にお世話になりました。3日間という期間でしたが、家族の皆さんとラオ語でお話をしたり充実した3日間になりました。そしてあっという間に時間は過ぎ、お別れの時が来ました。私は”絶対またここに来よう”そう思いました。

こんな素晴らしい機会を用意してくださった皆さんありがとうございました。



国は違えどみんな一緒！

玉川学園中学部3年 若松 妃奈乃

2017年12月23日から12月30日までのじゃっどスタディツアーについて、以下の通り報告いたします。

今回、ラオスに住む人々の生活をホームステイ、学校訪問を通して実際に体験する、そして日本の文化を伝え、改めて日本、世界を知るという目標を立てて行きました。

1. ホームステイ

ラオスの首都ビエンチャンから車で7時間ほどにあるタケク村で二泊三日、ホームステイの家族と寝食共に過ごしました。言語も全く通じず身振り手振りや少しの単語を頼りにコミュニケーションをとることを心がけました。ホームステイ先の子供たちとは日本から持ってきた折り紙で鶴、花を教えることで言葉の壁を取り除くことができました。

2. 学校訪問

タケク村の子供たちは、色々なものに興味を示してくれました。特にシャボン玉は大人気でした。私たち学生はコップチャイーありがとう、サバイディーこんにちは、などの簡単な日本語で交流を深めることができました。また、日本からのタオルや人形のプレゼントは村でも役立っていて嬉しかったです。

感想

今回のスタディツアーを通して、日本と様々な文化や環境に違いを感じました。床に座って手でご飯を食べる、水道のシステムが普及していないなど私が過ごしてきた日本とは全く違いました。でも現地の人々は村の人全員と家族のように過ごしていてとても羨しかったです。ラオスにはフレンドリーで陽気な人たちがたくさんいてずっと居たいと思うくらい素晴らしい時間を過ごせました。また、観光地で1番印象に残ったことは「COPE」という義手や義足の展示してあるところです。日本は戦争で沢山の人が亡くなりました。今でも沢山の人が苦しんでいます。そしてラオスも不発弾が未だに人々に暮らしに悲しみをもたらしていることを知りました。これらのことから私は世界中でテロや事件が起こっているけれど最終的に人々が求めることは平穏な生活だということに改めて実感しました。これからの未来を担う私たちはその事を心に留めて考えていく必要があります。その事を教えてくれた今回のツアーに参加させてくださりありがとうございました。



ラオスタディツアーに参加して

鹿児島県立川内高等学校 2年 牛之濱ひかり

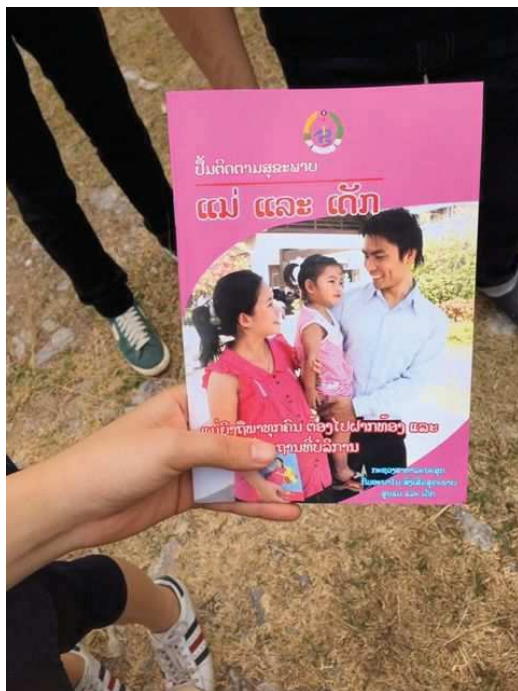
私は学校でスタディツアーの学生応募があることを知りました。発展途上国での看護活動に憧れ、助産師になりたい私はこの応募に大変魅力を感じました。実際参加してみると期待を超える素晴らしい体験をさせていただきました。

一番印象に残っているのは、ラオスの子供達です。小学校で手作りの首飾りや花束を持ち、「サバイディー」と迎えてくれた時は感激しました。みんな人懐っこく、一緒に鬼ごっこや折り紙をして遊びました。純粹だけど、どこか大人びた目をしているラオスの子供達の屈託のない笑顔は忘れることができません。



村の病院に訪問した際は、ラオスの母子健康についてお話を聞くことができました。記念に頂いた母子手帳と共に、助産師になる際の励みにします。

村での生活で不便な点は多少ありましたが、先進国で生きる私達が学ばなければいけないことをたくさん発見できました。このような機会を与えて下さった方々に心から感謝します。



コップチャイ

鹿児島県立川内商工高等学校 2年 藤崎麗美

やっと実現できた。じゃっどのラオス派遣活動に参加し、実際に自分の目で見て体験することが目標だった。

12月23日。私は楽しみ、不安などいろいろな感情が混ざりながらラオスへ向かった。日本との時差は2時間。気温は少し高くて夏服で過ごした。現地に着き、びっくりしたことがあった。それは道路だ。日本は信号機がありスピード制限も厳しいが、ラオスはバイクを二人乗りでビュンビュン走り、信号機もなく少し危ないと正直思ったが、現地の人たちは慣れているのだと感じた。

私が特に不安だったのが言語だ。英語は学校の授業でも習っており、日常会話程度ならできる。しかし、ラオス語。現地で通じるか不安だった。私は、2日間ホームステイをし、ラオスの家族ととても仲良くなれて嬉しかった。ジェスチャーで表現したり、一緒にご飯を食べたり、何もかもが一生の思い出となっただろう。そして、私は現地の学校へ視察しに行った。自分が想像しているより熱いおもてなしを受け、本当に嬉しかった。現地の子供達としゃぼん玉をして遊んだのだが、子供達の笑顔を見ると私も自然と笑顔になった。周りを見てみると、じゃっどに参加している学生も楽しそうに会話していて、この時間が本当に幸せに感じた。



笑顔は人を幸せにする力があるのだとその時強く思った。

また、私はラオス公共保健省の施設内にある[COPE]に行った。左の写真は、爆撃から逃げる母と子だ。このモニュメントから戦争の悲惨さなどが、伝わってくる。施設内を見ていると COPE に来る人たちのメッセージを書いているノートがあった。そして私は日本人が書き残しているメッセージを見つけた。それには「この国の人たちがどうして笑顔でいるのか、今を幸せに生きようとしてるから。」と書いてあり、それを読んで私は納得した。

今回、このような体験ができて私は本当にラオスに来て良かったと思った。8日間の大事な体験を忘れず、このような機会を下さった皆様に感謝し、日本でラオスの現実を発信していきたいと思った。

ラオスタディツアー 報告書

滋賀県立大学 環境科学部環境政策計画学科 4回生 今田晃憲

私は2017年12月23日から12月30日に認定NPO法人じゃっど様の主催するラオスタディツアーに参加させていただきました。私は『発展途上国における水不足問題に携わるNGOと他組織との連携の促進・阻害要因に関する研究—給水施設の持続可能性に着目して—』というテーマで卒業研究をしています。私は実際に途上国の農村での給水施設、村人による施設の維持管理、水問題の現状について自分の目で見て確かめたいと思い、今回のツアーに参加しました。本報告書ではカムアン県タケク村で実施した調査内容について報告させていただきます。

まず、タケク村の概要について、人口1682人、男性866人、女性816人、村人の80%は農農民でした。次に村の水資源について述べます。タケク村では2004年以前は外部からの支援を受けておらず、各家庭に浅井戸、村全体に12基の深井戸がありました。浅井戸は約8~10m、深井戸は約10~12mの深さでした。浅井戸の使用目的は水浴び、洗濯などの生活用水です。また、深井戸の用途は生活用水や畑の水やりなどです。これらの井戸はすべて村人によって設置されました。しかし、井戸の水質は良質ではありませんでした。そこで2004年に群の推薦により、ドイツの開発支援団体によって6基の深井戸が支援されました。これらの深井戸は30~50mの深さで水量、水質ともに良質でした。また、2013年には韓国政府主導で、村に上水道設備が導入され、学校や村長の家など村の国道付近の約20%に普及しました。今後は上水道をさらに拡大する予定ですが、具体的にいつまでに何%拡大するなどの計画はありませんでした。

最後に今回のツアーでの感想を述べます。私はラオス農村部での水不足問題はもっと深刻であると考えていました。しかし、村ではすでに上水道が導入され始めており、非常に驚きました。また、井戸の管理も村人によって行われており、予想とは違い驚きました。

しかし、村ではよい水資源があるに関わらず、手洗いなどの習慣はあまり広がっていないと感じました。また、道端に動物のフンやごみなども落ちており、衛生教育・習慣がまだまだ浸透していないと感じました。私は今回のツアーで得た経験を活かし、発展途上国の水不足問題、日本で国際開発に携わる団体の皆様のお役に立てるような研究が出来るように頑張ります。じゃっど様、貴重な経験をさせていただき本当ありがとうございました。



左：村人が設置した深井戸 真ん中：ドイツの開発支援団体による深井戸
右：ヒアリング調査にご協力いただいたソムサックさんの家の井戸

忘れかけた大切なもの

鹿児島大学医学部医学科 1年 藤澤 佳恵

将来、医療分野で海外貢献したいという思いから、学生のうちに多くの海外を見、国の文化や現状を知りたいと考え、大学で所属していた国際交流サークルの募集で何気なく応募したラオスタディツアー。恥ずかしながら、ラオスは発展途上国でまだまだ未発達、そこには日本人にはとても理解できないような生活があるのだろうと思っていた。しかし、それは勝手な偏見であった。現地で私を待ち受けていたのは、自然に溶け込んだ集団生活、習慣を重んじ時計に束縛されないゆったりとした時の流れ、そして誰に対しても礼節と思いやりを忘れない人々であった。ネオン色に飾られた立派な建物や、バイク・自動車にあふれた首都ビエンチャンと、水田や川に囲まれた集落が並び水牛や鶏が散在するホームステイ先のタケク村とでは流石に発展の度合いは異



なれど、風呂の水が冷たいこと以外、さほど生活に不便を感じることはなかった。驚いたことに、このタケク村にもWifi環境が整っており、彼らはfacebookも活用していた。

現地では、小学校に赴いて机椅子の寄付を手伝うほか、現地の医療センターの見学、ナイトマーケットや凱旋門などの観光、そしてカオニャオ（ラオスの主食ともいえるもち米）をはじめとするラオス料理を堪能した。ちなみに、私事ではあるが、メコン川を臨んでのランニングもまた良い思い出となった。中でもこれから医学につかる身として医療センターの見学は非常に印象的であった。24時間で運営しており、日本を参考にして母子手帳やカルテ制度が最近になって導入されたということは、とても興味深かった。しかし、やはり発展途上国の村の医療施設とあって、

医療器具は簡易的なものが多く、十分に整っていないように感じられた。例えば、お産の際に妊婦が横たわるベッドは単純なつくりゆえに、妊婦の体への負担は大きいものと想像できた。都市部の病院でもこのような器具が用いられているかどうか、また気になる場所であった。

ホームステイや現地の子供たちとの触れ合いを通して、日本人が忘れかけてしまった便利さには代えられない大切なものがこの国にはあるように感じられた。それは、村全体が家族であるかのような人と人との深いつながりである。貴重な経験をさせていただいたことに感謝し、これからもこのラオスという国に関心を持ち、人との絆を大切に生きていきたいと思う。

ラオスが教えてくれたこと

福元重子

娘の住むラオスを訪ねたいという目的でラオスへの旅を模索していた私が、「NPO 法人じゃっど」の葉を手にしたのは全くの偶然だった。「鹿児島でラオスへの支援活動をしている団体がある、現地視察のツアーもあるんだ。」と知り、まるで運命の巡り合わせのような不思議な縁を感じ、早速事務局へ連絡をし、活動報告を聞きに川内を訪ねた。報告内容とアットホームな雰囲気感銘し今回のスタディーツアーに参加する運びとなった。

実はラオスは、ニューヨークタイムズで「世界で一番行きたい国」の一位に選ばれており、「ゆったりとした時の流れに身を任せて、古き良きアジアの雰囲気を感ずるところ」と旅をした人は口々に言うほど旅行者には人気の高い国らしい。そんな事も知らず、言葉もとうとう「サバーイディー」と「コープチャイ」しか憶えられないまま、出発の日となった。

2つの単語しか話せない私が子ども達と交流できるだろうか。みんなが美味しいと絶賛していたラオスの食事をはやく食べてみたい等々、不安と期待とが半々のまま、飛行機はラオスの地に着いた。

初めての訪問先であるタケクの小学校に着いた時、校門の両側に子ども達が整列し待っていてくれた。花のレイを手にした子ども達は可愛い笑顔で、校門をくぐる学生の首にレイを掛けていた。その光景を見た途端に、不安は一瞬で吹き飛び、胸がジーンと熱くなった。子ども達に、名前を聞くと元気に教えてくれ、私の名前も「シゲコ、シゲコ」と呼んでくれる。明るく、素直な子ども達と一緒に、ダンスをしたり、折り紙をしたり、言葉の壁など微塵も感じない。ラオスの魅力、それは人々の優しさと望郷であり、「ポーペンニャン」というゆったりとした時の流れの中で生まれた、懐の深いラオスの文化だとつくづく感じた。



職業柄、ヘルスセンターの見学や DrSomchit の広めた母子手帳の話も大変興味深く、勉強になった。母子手帳は、20~25年前はラオスにはなく、DrSomchit が訳して広めようと尽力されたそうである。しかし、初めは誰も同意してくれなかったため、日本と同じピンク色にして、国中に広めていったとのこと。日本の母子手帳が外国で認められて、活躍していることを知り医療従事者のはしぐれとしては嬉しい思いだった。

楽しいツアーの最終日、COPE Visitor Center で、不発弾の実情を知った。ベトナム戦争時代にその戦禍に巻き込まれたラオスは、人類史上最も激しい爆撃を受けたそうである。その量は200万t以上にのぼり、今でもその不発弾が多くの犠牲者を生んでいるとのこと。戦争の犠牲者はいつの時代も何の罪もない子ども達である。よその国に大量の武器を捨てて知らん振りをしている大国と呼ばれている恥知らずの国に対して怒りが湧いた。

このツアーに参加して、無知な自分を痛感した。そして自分にできることは何だろうか、思案しながら、またラオスに行きたいなあとの機会を画策している日々である。

ラオスの皆様、そしてじゃっどの皆様、本当にコープチャイ。そして、ポップカンマイ。

ラオスタディツアーに参加して

橋本晴美

今回の旅で一番感激したのは首都ビエンチャンから車で5、6時間離れた、タケク村の小学校を初めて訪れたときでした。子どもたちがゲート(?)の両側に並んでわたしたちのバスが着くのを待っていてくれました。みんなニコニコ、とびっきりの笑顔でした。予想以上の歓迎ぶりに思わず涙がにじんできました。家々はまばらなのに、どこからこんなにたくさんの子どもが?というのも驚きでした。学生がホームステイした村の民家を見学できたのも、ラッキーでした。



ラオスには日本の何十年も前の風景が広がっていました。校庭には数匹の犬、放し飼いの牛、めんどりもひよこたちを連れてお散歩……。そこにスマホ、プラスチック製品など現代の便利なものはいつてきています。そのせいで問題もあるようです。ここ数年でバイクや車が増えたそうですが、ビエンチャン市内でも道路の整備が追い付いていないようでした。幹線道路の横にはずーとごみが続いていました。衛生面もまだまだのようでした。一方で、わたしにとって憧れの日常もありました。バスから見る沿線の家々には必ずと言っていいほど大きな木があり、その下に広いテーブルとイスを置き、大勢で食事をし、団らんをしていました。



今までいろいろな国へ行きました。観光名所をかけ足で巡るパッケージツアーより、そこで暮らす人々とじかに触れ合い、ゆっくり話したくて、大半は自分で企画して旅してきました。今回のスタディツアーは、これまでの旅の中でも特に貴重な体験満載のすばらしいものでした。参加させていただき本当にありがとうございました。じゃっどのスタッフの方々は豊富な知識をお持ちで、何を聞いても的確なお返事が返ってきます。とても勉強になりました。ラオスへの深い愛情も感じられました。あの時に会った子どもたちの中から、じゃっどを通じて日本を身近に感じ、興味を持って、5年、10年後に留学生などとして日本へ来てくれる子が出てくるのかな、と楽しみです。

わたしのおみやげ話を聞いて、友人二人がさっそく次のスタディツアーに参加したいと言っています。

ラオスタディツアーに参加して

狩俣久美

出発前のラオスの印象は、5つの国に囲まれた海のない国、世界最貧国、トイレに苦労する、などでした。ラオスに着き、首都ビエンチャンからタケク村（活動地）に向かうバスの中、「退屈するかもしれません」と聞きましたが、そこここにいる牛や水牛、犬や、



鶏、山羊やアヒルを見かけると、動物好きの私の視線はそれらに釘付けになりました。季節は乾季で過ごしやすいという事もあり、道路沿いの民家の人達が家の前でくつろいでいる姿が印象的でした。子供の頃の風景を思い出す一方、普通に携帯電話を扱う姿を見ていると、日本の過去と現代が混在したような不思議な感覚でした。

次の日、近くの小学校を訪問しました。小学校に到着した私たちを、たくさんの花飾りや花束を抱えた子供たちが笑顔で待ち受け、その心温まる歓迎にとっても感動しました。そこで子供たちと話をしたかったのですが、思うように話しかけられないまま、コミュニケーションがとれずに少し残念でした。一

方、同行した高校生や大学生の周囲には子供たちが群がり、お互い上手に楽しそうに遊んでいました。そんな姿を見ながら、若い時にこのような体験ができるのは、とても素晴らしい事だと感じました。今回のツアーでは、村の中を初めて見せていただき、お土産（頭に被る笠）や織物機等の実演見学が出来ました。また、偶然あった地元の結婚式にも飛び入り参加させてもらったことなど、村人あげての歓待を数多く受けました。今の日本には乏しくなった、動物たちと上手に暮らす姿、紙や水など物を大事に使う様子などを目の当たりにして、物に溢れた日本の将来を危惧したのは私だけだったのでしょうか。

旅行にはあまり行かない私ですが、今回姉に誘われた時は率直にこのツアーに興味を持ちました。しかし、日程が私にとって忙しいクリスマスの時期だったためしばらく躊躇していたのですが、周囲が背中を押してくれたこともあり、ツアー参加を決意できました。その結果、多くの人とのすば



らしい出逢いや貴重な体験は、大きな糧となり同時に皆様への感謝の気持ちでいっぱいあります。帖佐夫妻とコンサップ夫妻の何十年という活動の継続や、“じゃっど”スタッフの皆さんの下準備のご苦勞がどれ程大変だったか、このスタディツアーの様々な場面でそれらを実感しました。本当にありがとうございました。

じゃっとスタディツアー-2017

